

PETLOSS

junicci

エルロイがひっそりと姿を消してから三ヵ月が経った。最初の二、三日はいつもの気まぐれで家に帰ってこないだけだと思っていた。だからなつきはたっぴりと餌を盛ったお気に入りの皿を、玄関の通用窓の前に置いておいた。だが一週間経っても餌はいっこうに減らなかった。動物の中でも猫族はプライドが高く、自分の死骸を人目につかないところに隠す習性があることに思い至ったのは、さらに五日間経ってからだった。

エルロイはなつきの東京での最初のルームメイトだった。なつきは十八歳の時、ケーキ職人を目指して福島から出てきた。初めての一人暮らしは快適な反面、いままで感じなかった瞬間に孤独を感じるが多くなった。それを聞いた調理学校のクラスメイトは、なつきの誕生日に一匹の仔猫を贈ってくれた。よく輝く褐色の毛と気品あふれるゴールドの瞳を持った、生後半年のアビシニアンだった。実家がブリーダーをやっているんだけど、たまたまこの子だけあぶれちゃってね。まあ残り物には福があるっていうし、健康だけは保証するから。なつきが抱くと、仔猫はみゃんと短く鳴いた。

なつきは仔猫にエルロイと名付けた。大きな耳と大いなる意思を内に秘めたアーモンド型の瞳、長いしっぽとしなやかな筋肉はジェイムズ・エルロイの犯罪小説のなかで活躍する暗黒街の男たちを思わせた。実際にエルロイは狭いワンルームの中を元気よく跳ね回った。何ごとに対しても好奇心旺盛で、そしてよく食べた。次第になつきはエルロイに恋に似た感情を抱いた。だがエルロイのほうはなつきをただの召し使いとしか思っていないようだった。

二年が経過し、なつきは調理学校のパティスリーコースを卒業した。就職部の斡旋で、青山にある有名洋菓子店に勤めることになった。なつきにはスポンジを焼く仕事が与えられた。くる日もくる日もなつきはスポンジを焼き続けた。それは退屈な仕事だった。だがあるとき、なつきはスポンジを焼くという行為の奥深さに目覚めた。スポンジの出来は、その日のなつきのメンタリティーに大きく左右されるのだった。それからというもの、なつきは自分のメンタリティーを意識して制御するようになった。よい音楽を聞いたり、お風呂にアロマオイルを一滴たらしたり、部屋の蛍光灯を間接照明に変えたり。そしてもちろんルームメイトのエルロイも、なつきの話の聞き役として大いに役にたった。エルロイがなつきに対して負う役割が、その日のスポンジの出来についての相談役から、新しい創作ケーキの味見係へと変わっていくのに、たいした時間はかからなかった。

そしてなつきは鎌倉にオープンする姉妹店を任されることになった。オープンの前後、なつきは寸暇を惜しんで動き回った。その成果もあってグルメガイドや情報誌にも何度か掲載され、鎌倉の店はオープン当初から繁昌した。すべてが軌道に乗り始めた時、なつきはエルロイに初めてフィアンセを紹介した。店の設計その他に関して一切を引き受けてくれた年下の建築家だった。

エルロイのいない冬を迎えるのは十三年ぶりのことだった。天気予報は今年の寒さは厳しくなるだろうと言っていた。夫はエルロイを失ったなつきを心配し、今年のクリスマスプレゼントに新しい仔猫はどうだろうと提案した。だがなつきは拒否した。欲しいのはエルロイなのだ。他のどんな仔猫だって、エルロイの代わりにはなれない。結局、夫は一週間のパラオ旅行をプレゼントしてくれた。なつきは旅先で夫に抱かれていても、ずっとエルロイのことを考えていた。

帰国してからも、なつきは仕事に対する情熱が薄れているのを感じないわけにはいかなかった。これがよく言うペトロロスだわ、となつきは思った。幸い鎌倉店には店の切り盛りを任せられる優秀な片腕がいたので、なつきは帳簿だけを引き受けて自宅で休養することにした。

朝六時に起床し、夫の朝食を作る。食器の後片付けをし、洗濯機を回す。掃除機を広い家の隅々までかけて、洗い上がった洗濯物を干す。午前時間は家事をてきぱきとこなすことで、効率的に消化されていった。それはなつきの才覚といってもいいものだった。

問題は午後だった。トーストとコーヒーで簡単な昼食を済ますと、もうなつきにはやるのがなかった。かといってテレビでくだらないワイドショーを見る気にもなれなかった。なつきは書斎のパソコンのスイッチをいれた。そしてインターネットに接続し、ホームページを眺めることで午後の時間の大部分を押し流していった。

なつきの訪れるホームページは、主に愛猫家たちが自慢の飼い猫を紹介しているページが多かった。ピピンというアメリカンショートヘアは、飼い主のハーモニカの音色に合わせて歌うのが得意だった。ヒマラヤンのベアトリーチェは、好物のマグロをわさび醤油で食べるということだった。自慢の猫たちの中にはアビシニアンもいた。裕次郎というグリーンアイのアビシニアンは十姉妹のマリリンと仲がよかった。だがどのページにもエルロイの姿はなかった。なつきはむさぼるようにホームページからホームページへと渡り歩いた。

愛猫家たちのホームページがあらかた一巡すると、今度はなつきは「Elroy」という単語で検索をかけてみた。800件以上のヒットがあった。なつきはヒットしたページを片っ端から眺めていった。多くはジェイムズ・エルロイの著作に関するページだったが、まったくの個人のページという場合もあった。その中のひとつに、アメリカ人の写真家のページがあった。彼は報道カメラマンで、コソボ紛争を丹念に取材していた。そこに掲載された戦地の写真は、生と死を雄弁に物語っていた。なつきはふと一枚の写真に目を留めた。死体の転がる砂利道を、一台のピックアップトラックが進んでいる。その荷台からワンピースを着た少女が足を投げ出し、力強い光をたたえた瞳でこっちを見つめている。その瞳になつきは懐かしいものを感じた。写真にはキャプションがつけられ、少女の名前とメールアドレスが付されていた。

夕食の支度をしながら、なつきははたしてコソボの少女にメールが届くものかと考えた。そして帰宅した夫に、コソボの紛争はどうなったのか訊ねた。NATO軍の介入によって紛争は半ば強制的に解決したはずだ、と夫は言った。だがNATO軍は武力介入の際に劣化ウラン弾を使用したから、コソボの住人はいまだに不便な避難生活を余儀なくされているんだ。

夕食の食器を片付け、なつきは店の帳簿の計算をしに書斎に入った。だが気になるのはピックアップトラックの少女のことばかりだった。なつきは決心をし、英語で少女に簡単なメールを書いた。

ハロー、リディアナ。私はあなたの住む国のずっとずっと東にある、日本という国に住んでいるなつきと言います。そちらの暮らし向きはどうですか？ わたしはつい最近、大切に可愛がっていた猫を亡くしました。十三年も一緒にいた猫を亡くするという経験はとてつらいものです。でも今日の昼下がり、あなたがトラックで避難する写真をインターネットで見るとき、あなたの瞳の中に懐かしい光を見た気がしました。猫なんかと一緒にされて気を悪くしたらごめんなさい。でもそれ以降、いままで猫のことを考えていたのと同じだけの時間を、あなたのことを考えて過ごしました。これはいったいどういうことなのか。私には説明が付きません。かといってあなたに尋ねたからといって説明がつくものでもないのですけれど。

日本はいま厳しい冬のただ中です。そちらの寒さもきっと厳しいことでしょう。お体に気をつけて頑張って下さい。そしてこんな奇妙なメールを勝手に送りつけたことをお許しください。

追伸 私の猫の名前はあなたの写真を撮ったアメリカ人と同じ名前、エルロイと言います。

なつきはメールを送信すると、パソコンの電源を切り、ベッドルームに向かった。夫はすでに気持ち良さそうに寝息をたてていた。なつきは暖かい羽毛布団の中にもぐり込み、夫の胸にそっと耳を当て、心臓の鼓動を聞きながら眠りについた。

それから七日間、なつきは午前中に家事をすませ、午後は外国の愛猫家のホームページを眺め、夕飯を作ってから夜は帳簿の整理をするという毎日を繰り返した。八日目にメールの返信が届いた。

親愛なるなつきへ。遠い所からのメールどうもありがとうございます。

こちらの冬も厳しいです。特に今年の寒さは一段とこたえます。人々は内戦で住み処を無くし、瓦礫の中から使えない家具を見つけてきてはたき火にくべ、わずかな暖をとっています。暖かい下水道で暮らしているみなしごたちも数多くいます。私たち一家はさいわいにも、夫が外交官をしている関係で暖炉の完備された官舎に住んでいますから、厳しい冬の寒さに対する心配は必要ありません。その点においては、多くの犠牲と引き換えに守りきった祖国に感謝せずにはいられません。

残念ながら娘のリディアナは去年の秋に亡くなりました。ある日ちょっと風邪をひいたと思ったら、みるみるうちに高熱が出て、医者が対処に手をあぐねているうちに眠るように息を引き取りました。その訪れはとても静かでした。私たち夫婦にとってたった一人の娘でしたから、その悲しみは例えようのないほどに深いものでした。リディアナもこんな内戦の激しい国に生まれなければ、きっと自由におしゃれをし、素敵な人と恋愛をして幸せに一生をおくることが出来たのだらうと、偶然のめぐり合わせというものを呪ったこともありました。でもそんな「もし」はあり得ない話です。私たちは最後にこう気づきました。リディアナは最後まで私たち夫婦のリディアナでいてくれた。それで充分なのです。

あなたの猫の不幸は心が痛みます。心からお悔やみ申し上げます。

あと四ヵ月もすれば、この凍てついた土地にも春がやってきます。何かを失った者にも、失わなかった者にも、春は平等にやってきます。私たちのように残された者たちは何よりもまず生きなければいけません。人々は新しい春をととても心待ちにしています。

追伸 エルロイのことは覚えています。彼も私たちと同じようにリディアナのことを可愛がってくれました。

なつきはさめざめと泣いた。明かりを消した書斎の中で、モニターに浮かび上がった英文の文字が次第にかすんで見えなくなった。徐々に閉ざされる視界の中で、なつきはもう戻っては来ないもののことを考えていた。